羊飼いの野（下）
～新約聖書の出来事②～

イエス・キリストの言動について書かれた新約聖書。その中心を成すのはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書である。

福音とは、イエス・キリストが説いた神の国と救いの教えのことだが、一般的にも「良い知らせ」という意味でよく使われる。

この言葉には恥ずかしい思い出がある。中学生の時、地区の弁論大会に学校を代表して出場した。私の原稿を事前に読んだ教頭先生が「これは私にとって大きな福音であった」という言葉を結びに付け加えたらと加筆して下さった。それを本番で「ふくおん」と言ったのである。

教頭先生は「僕がいらぬ言葉を加筆しなかったら優勝だっただろう」と悔やまれた。福音の本当の意味を正しく理解したのはそれから二十年ぐらい過ぎてからだ。

横道にそれたが、四つの福音書のうちマタイ、マルコ、ルカの三つを「共観福音書」と呼ぶ。三つの福音書の内容や記述に共通する部分が多いからだ。

イエスがベツレヘムで誕生したことはマタイとルカ福音書にある。これほどの「グッド・ニュース＝福音」はない。ベツレヘムから二キロ離れたベイト・サフールの村の羊飼いたちに天使が現れてそれを告げたとある。（ルカ二章）。

今回初めてベイト・サフールの羊飼いの野を訪ね「羊飼いの野の教会」を見た。新約聖書に書かれている出来事を伝承するために必ずといっていいほど、そこに教会が建てられている。それらが福音にとってそれだけ重要であることの証しともいえる。

本棚から「福音」という言葉がタイトルについた本を取り出し読んでいると、妻が一言「イエスはキリスト（救い主）」であると。確かにその通りで、それを信じるのがキリスト教信仰である。

言われるままに訪れた羊飼いの野。当時最も身分の低い、弱い立場の羊飼いにイエスの誕生を最初に告げられた意味は大きい。そこに建つ教会の近くに遺跡があった。改めて二千年前の出来事だと実感する。

ベツレヘムに引き返すために幹線道路に出てしばらく走ると、娘がタクシーを止めた。右手前方を指差しながら「あれがハルホマの入植地」と言う。ベツレヘムはパレスチナ自治区の中心地であるのに、そこにイスラエル人の高層住宅の入植地があるのだ。ただあるだけではなく、周囲を電気の流れる有刺鉄線や壁で分断し、パレスチナ人はそこを通ることもできない。

ユダヤ人は二千年もの間、世界各地に離散、各地で虐げられた民族だった。それが今、強者となり、弱者とともに歩む姿勢がないことに腹立たしさを覚える。

一貫して弱い立場の人の側に立ち、福音を説いたイエスを十字架に架けたユダヤの群衆。誰の心の中にも人間の弱さ、原罪がある。福音的価値観で生きることは簡単ではない。

腹を立ててばかりいても仕方がない。まず腹ごしらえ、昼食は運転手さん行きつけのパレスチナ料理。ホブスという丸いパンに前菜を挟んで食べる。食生活を含む異文化を大切にすることも福音的生き方と思いつつ…。

ベイト・サフールから見た入植地

昼食のパレスチナ料理＝この前菜のあと鶏肉を焼いたものが出た